

平成26年度

協働のまちづくり大賞 事例集

大分市 市民協働推進課
平成27年9月



目 次

協働のまちづくり大賞について 1

26年度 受賞事例

【協働のまちづくり大賞】

○住民と高校生の協働による花いっぱいのまちづくり（川南自治会） 2

【優秀賞】

○上宗方秋まつり（上宗方自治会） 4

○「絆」（南下郡自治会） 6

○富士見が丘自主防犯パトロール隊の活動（富士見が丘自主防犯パトロール隊） 8

○3世代で取り組む裏川・大分川の環境美化活動（津留地区ふるさとづくり運動推進協議会） 10

【奨励賞】

○3世代交流グラウンドゴルフ大会（高尾台自治会） 12

○様々な活動を通じた地域づくり [周辺自治会と協力したまちづくり]（東大道1丁目自治会） 14

○町内会行事の活性化で、住民のふれあいと和 [絆] の強化（新川町内会） . . 16

○自治区民参加の「高江芸能まつり」を通じた地区・世代間交流（高江区自治会） 18

○原村自治会活性化事業（原村公民館） 20

○高城子ども会「防火パトロール」（高城子ども会） 22

○地域の子どもはみんなで守り育てよう！（別保校区ヤングサポートパトロール隊） 24

○けやき台マップの作成および相互協力体制の確立（けやき台自治会） 26

○地域行事でのステージ出演による地域活性化（H I O K A 4 8） 28

○大柳自治区内子供の夏休みの思い出づくりならびに地域の皆さんの懇親の場作り（大柳自治会） 30

○体操教室で高齢者の健康づくり [西区いきいきクラブ教室]（宮河内ハイランド西自治会） . . 32

協働のまちづくり大賞について

協働のまちづくり大賞は、市民の皆さまに、市内でどのような自治会活動が行われているかを知っていただき、まちづくりの参考にし、自治会の更なる活性化につなげていきたいという思いから、平成23年度に創設されました。

平成26年度は「世代間交流」・「コミュニティの活性化」・「安心安全のまちづくり」・「青少年健全育成」・「地域福祉向上」・「日本一きれいなまちづくり」の6つのテーマを設けて募集を行い、昨年度を上回る団体の皆様から応募をいただいたところです。

この度、平成26年度に応募のあった全ての活動事例をまとめた事例集を作成いたしました。

この事例集が、今後のまちづくりの参考となるだけではなく、今まで自治会活動に関心のなかった人たちにも自治会活動を知っていただき、関心を持つきっかけになればと考えております。

【世代間交流】

- ・高尾台自治会
- ・東大道一丁目自治会
- ・上宗方自治会

【コミュニティの活性化】

- ・新川町内会
- ・南下郡自治会
- ・高江区自治会
- ・原村公民館

【安心安全のまちづくり】

- ・高城子ども会
- ・別保校区
- ・ヤングサポートパトロール隊
- ・けやき台自治会
- ・富士見が丘
- ・自主防犯パトロール隊

【青少年健全育成】

- ・HIOKA48
- ・大柳自治会

【地域福祉向上】

- ・宮河内ハイランド西自治会

【日本一きれいなまちづくり】

- ・津留地区ふるさとづくり運動推進協議会
- ・川南自治会

※会長名・代表者名などにつきましては、応募当時の方の名前を記載しております。

26年度協働のまちづくり大賞

テーマ：日本一きれいなまちづくり

住民と高校生の協働による 花いっぱいのもちづくり

川南自治会 塩地 成元

地域の課題

地域の環境美化の一環として、河川や道路の草刈りやごみ拾いを行っていたが、ツツジを植えている道路の植栽枒が雑草でいっぱいの状態となり景観が損なわれていた。

また、この地域は大分東高校の生徒の通学路となっており、「住民に会ってもあいさつをしない、自転車で横いっぱいになって走るなど、生徒の態度やマナーが悪い」と住民からの苦情が出ていた。

住民と生徒とは交流がないため相互理解ができず、誤解や偏見でしか評価しておらず、態度やマナーだけを注意しても何の解決にもならないと自治会では考えていた。

このような中、坂ノ市地区において、平成18年度から新規事業として「環境美化・花いっぱいのもちづくり事業」に取り組むことが決定されたため、自治会としては、地域住民の参加のもと

東高校の生徒も巻き込んだ協働の取り組みにより、世代間交流や相互理解を深め、花いっぱいのもちづくり事業を展開していきたいと考えた。

取り組み内容

地区の幹線道路となっている市道の雑草地帯を整備するため、ツツジ及び雑草の根を撤去し、新たに花の苗を植え付け、見違えるような植栽枒が完成した。

作業は2回に分けて延べ³²⁵人（地域住民65人、東高校の生徒²⁶⁰人）の参加のもと、この幹線道路が花でいっぱいになるのを思い浮かべながら、協働で作業に取り組んだ。

現在も花の苗の植付けは、春と秋の年2回、地域住民と東高校のボランティア委員会の生徒を中心に継続して実施しており、平成23年度からは、秋の植付けの際は、全校生徒が参加するようになり、川南地区だけでなく周りの地区へも地域の奉仕活動として取り組みが展開されている。

【育苗用ビニールハウスの設置】

花の苗については、地域で種まきからやっけて行きたいと考え、古いハウスの骨組みを入手して組み立て、それにビニールをかぶせて、花の苗を育てるビニールハウスが完成した。このビニールハウスで約2千本〜3千本の花の苗を育成することが可能になった。

【協働作業】

今の生徒の大多数は、家庭等で農作業の経験が全くないため、苗の植付け作業の際には、地域住民と生徒でグループをつくり、学生に苗の持ち方から植え方までを住民が丁寧に教え作業を行った。作業終了後は、一緒にお茶を飲みながら雑談を交えてコミュニケーションを図った。

【地域住民への情報提供】

花づくりや東高校の生徒たちとの協働作業の様子や感想をはじめとした地域の活動状況、防災の取り組み、行事等様々な情報を全家庭にお知らせするために、広報紙「川南通信」を毎月2回かささず発行している。

【大分東高校によるイーストガーデンの設置】

大分東高校も川南地区の一角に土地を確保して、生徒たちが学校で育苗した花の苗を植え、水やりから草取りまでの全てを生徒たちで管理するイーストガーデンを設置している。

活動の成果・今後の展望

協働作業により、地域住民からは「明るいよい生徒だ」、「植え方を教えると『はい』『ありがとう』とはつきり言える生徒たちで好感が持てました」、「一緒に作業をして楽しかった」、「若い人からパワーをもらった」などの参加住民からの感想が聞かれ、相互理解することで信頼関係が少しずつ構築されてきたと感じた。

また、通学時は生徒の方から「おはようございます」の声が聴こえるようになり、住民からの苦情もなくなった。

川南地区は、「みんなの、みんなによる、みんなのため」を基本として自

治会運営を行っており、今後とも、全家庭へ様々な情報提供を行っていくとともに、相互理解を深めながら小さな助け合いのできる「ゆるやかな協力関係」を築き上げて、地域住民が「ここに住んでよかった」と実感できるようになまちづくりに取り組んで行きたい。

また、まちなみを花で飾ることで、花を愛する心がやがて人を愛する心につながっていくよう、さらに、訪れる方々に安らぎと癒しを提供しここに来ればいつでも花を見ることができると言われるようなまちづくりを、地域住民が主体となつて東高校の生徒と協働しながら、今後とも継続して行きたい。



住民と高校生の協働作業の様子

26年度優秀賞 テーマ:世代間交流

上宗方秋まつり

上宗方自治会 安東 幸吉



秋祭りステージイベントの様子

地域の課題

自治会内の高齢化が進み（30.5%）地域内の共助が不可欠な状況となっており、近隣者と助け合うことが出来る事業の実施や体制の構築が喫緊の課題となっていた。

そこで、「上宗方秋まつり」を行うことで近隣者と子どもたちとの世代間交流や自治会の組織化、防災体制の充実などにつなげていこうと考えた。

取り組み内容

11月に上宗方秋まつりを開催、参加者対抗玉入れ競技や、公民館でのステージイベント、もちつき、露天販売、食事会などを実施している。

開催に当たっては実行委員会年6回、組長会議を年2回行い、綿密な打ち合わせを行っている。

また、チラシを全世帯に配布し参加を呼びかけている。

子ども会による看板製作、8地区に看板掲示、広報車などで参加を呼びかけるほか、地元ケーブルテレビに取材依頼をしている。

【特に工夫している点】

①コンセプトを「世代間交流」とし、「じいちゃん、ばあちゃん、父ちゃん、母ちゃん、子ども達」が参加して主役になれるように役割分担をしている。
餅つきの場合、子どもがつき、母親がもちきり、父親が米や臼の準備、袋入れを祖父母といったように分担している。

②自治会が自主的・主体的に物事に取り組む状態を維持するため、秋まつりの実施に当たっても会議を繰り返しており、何かあったら相談・みんなで考える体制を整え、自分たちで住みよいまちをつくることを実践している。

③秋まつりは防災体制の充実を兼ねており、防災時の炊き出し、公民館の利用、体制の整備、人材の育成等のシミュレーションの場となっている。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

①「世代間交流」ができ、みんなの笑顔を見ることが出来た。

②まつりの実施という目標にむけて何回も会議等を行っていくことを実践した結果、自治会組織内で何かあったら相談し、できる事は自分たちで解決するという体制が整った。

③秋まつりを通して、防災時の「炊き出し」等のシミュレーションを実施できた。

【今後の展望】

住民の要望と費用対効果などを図りながら、改善点がないか模索している。



秋祭りの様子

26年度優秀賞

テーマ:コミュニティの活性化

「絆」

南下郡自治会 原田 晃

地域の課題

平成14年に南下郡地区の区画整理が完成し、住民が急増、人口が10倍以上に膨らみ、従来からの住民と新たな転入者が混在している状況である。

新旧住民は生活様式・価値観の相違などから必ずしも一体になれず、町内会運営の場で不協和音が生じることもあった。

しかし、近年続発している自然災害への備えという点からも住民同士の「絆」の重要性は高まっており、町内会として「絆」構築の各種取り組みを実施することとした。

取り組み内容

【子ども相撲】

毎年開催している地域の「水神祭」に「子ども相撲」を奉納しており、地区の子ども会・青年団・老人会にそれぞれ的事前準備を依頼している。相撲には小学校1年生〜6年生の約60人参加

加しており、これにそれぞれの家族等の応援が駆けつけ、大変な盛り上がりを見せる地域の春の一大イベントになっている。

【町内大運動会】

本年度で6回目を迎え毎年約400名の参加者があるが、これまでは行事を消化するだけの傾向が強く、盛り上がりにかけていた。

そこで、26年度から新しく選任された町内会長を中心に活性化に関する議論を重ね、最後の競技に「小学生から成人までの8人1チームを編成して行う「町内会別リレー」を取り入れた。

【供養盆踊り大会】

昭和30年代当初は地元の人たちによる生演奏を行っていた。しかし近年は演奏テープを流しての実施となっており、盛り上がり欠けるのではないかという意見があがっていた。

この現状を杞憂し、地元有志が笛・太鼓・三味線・唄・尺八等の演奏をする生演奏隊を結成し、3か月間訓練を繰り返したうえで本番に臨んだ。

【早朝ラジオ体操】

市が提唱する「市民の健康づくり」を地域内に定着させることを目的に町内会と健康推進員が住民に呼びかけ南下郡公園で朝のラジオ体操を開始し、広く住民に参加を呼び掛けた。

【特に工夫している点】

【子ども相撲】

回覧、放送塔での呼びかけに加え、子ども会役員・組長会議での声かけを行い出場者を集め、応援席も父母、祖父母、兄妹とにぎやかな大会になった。

【町内大運動会】

リレーの際は全員が総立ちになり応援し、お互いの結びつきが強まった。出場者はそれぞれ真剣になり、転倒する人も多いが見ている人も微笑ましい。

【供養盆踊り大会】

なんとか伝統を復活させようと演奏者を募ったが当初は希望者がゼロであった。

町内を飛び回り、高齢者から中学生までの幅広い世代からどうにか人数をそろえて月三回の練習を行い本番を迎えた。

演奏する舞台も専用のやぐらを組み、知人の活躍が住民の評判を呼ぶ形となり、800名以上の住民が集まり大盛況であった。

【早朝ラジオ体操】

一人二人と声を掛け合い、10人から参加者を増やしていき50名程度の参加者となった。

足腰が良くなった、朝食がおいしいとうれしい声が届いている。

夏休みには欠かさず参加する子供も増えており、世代間交流の場となっている。

活動の成果・今後の展望

子ども相撲、町内大運動会については、一日限りの行事であり、怪我のないように配慮しつつ今後も盛大かつ有意義なものとしていきたい。



子ども相撲の様子



町内大運動会の様子

供養盆踊りについては、4回目の生演奏を終え、メンバーの顔にも余裕がみられるようになり同地区内にある施設への慰問活動に出演するなど活動の幅を広げている。

施設からも大変喜ばれ、特に車いすの高齢者が演奏に合わせ一生懸命に踊っている姿に胸を打たれた。ラジオ体操については、参加者からも体調がよくなったと好評であるが、寒冷期である11月から3月までは休止しており、今から春が待ち遠しい気分である。

26年度優秀賞

テーマ:安心安全のまちづくり

富士見が丘自主防犯 パトロール隊の活動

富士見が丘自主防犯パトロール隊 佐々倉 幸義



パトロールの様子

地域の課題

隊を発足させた平成15年当時、全国的にも県下でも犯罪が増加しており、ここ富士見が丘でも侵入盗、のぞき、下着泥棒、シンナー遊び、不審者などの事案が発生していた。

取り組み内容

警察の指導の下、富士見が丘自主防犯パトロール隊を結成し、まずは夜間パトロールから取り組みを始めた。現在では、パトロール活動の3本柱として、

「下校時児童の声掛け見守り」

「夜間徒歩のパトロール」

「青色回転灯装備車(青パト)を使用したパトロール」

を実施している。

下校時児童の声掛け見守りは、第2第4の火曜日と水曜日、近隣小学校の下校児童を対象に行っている。

夜間徒歩のパトロールは9班がそれ

ぞれ月に1〜2回(計15回)実施しており、20時から約1時間程度、拍子木とハンドマイクで注意喚起を行っている。

青パトを使用したパトロールについては、青パトを運転することが出来る青色防犯パトロール講習を34名が受講しており、9班が1週間の持ち回りで実施している。

【特に工夫している点】

パトロールは「気軽に」「気長に」

「危険なく」「見せて」「聞かせて」

「声かけて」をスローガンに実施しており、犯罪を起こそうとしている者に犯行を諦めさせる、当地域への接近を諦めさせる、住民に安心感を持ってもらうという効果がある。

また、犬と一緒に散歩をする人にも協力を依頼し、「わんわんパトロール」と題し散歩する飼い主の方にはタスキを、犬にはバンダナを支給しパトロールを行っていた。いている。

パトロール以外にも、平成21年4月から振り込め詐欺撲滅活動にも取り組

み、ATM周辺広報活動として年金支給日に約2時間、地域内のATM2か所で利用者約250人に対しチラシの手渡しを行っている。

また、振り込め詐欺防犯寸劇を当地区の敬老会、文化祭、老人クラブの忘年会で披露している。

「〇〇詐欺の手口」と題して台本も自作、これまで計24回実演しており、延べ1950人の方に見ていただいております。近隣団地の敬老会や市政100年記念芸能文化祭でも披露するなど地域外にも活動の幅を広げている。

広報活動として、平成23年にパトロール隊独自に広報誌を発行したほか、連合自治会が毎月発行している「富士見が丘だより」の防犯コーナーに大分南警察署や消費生活センターからの情報、団地内の事件、注意事項、協力依頼を掲載、パトロール隊の活動報告を適時掲載している。

また、県内のパトロール隊を相互に訪問をするなど交流を図り、連携を取っている。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

パトロール隊が発足して10年が経過したが、隊員の献身的な活動のおかげで理解者が増え、住民との連帯感が深まり、防犯意識の向上に寄与していると実感しており、住民から信頼され安心感を与える存在となってきた。

隊員にとっても心身の健康保持の励み、地域社会とのふれあいの場づくりとしての存在になっている。

隊員の高齢化が進行しているため、隊としては若年層の参加に重点的に取り組みつつ、今後もさらなる防犯意識の高揚と連帯感を醸成し、輝ける元気な組織としてより一層信頼される存在となっていきたいと考えている。

26年度優秀賞

テーマ：日本一きれいなまちづくり

3世代で取り組む裏川・大分川の環境美化活動

津留地区ふるさとづくり運動推進協議会 河野 充宏

地域の課題

津留地区は大分川と裏川に囲まれた三角州に位置している。ふるさとの風景として子どもから年配者まで普段から慣れ親しんでいるこの二つの河川の環境美化が課題となっていた。

取り組み内容

【津留地区河川クリーン活動】

5月の下旬に大分川河川敷に集合し、舞鶴校区は北回り、津留校区は南回りで大分川と裏川河川敷をゴミ拾いし、平和市民公園にて合流。

河川敷に500名の地域住民が一堂に集い、住民の一体感の醸成にも効果が大きい。また、ゴミを拾いながら河川敷を歩くことで、三角州である津留地区の地域性の再確認にもなり地域へ愛着を深めるきっかけと健康づくりにも役立っている。

【裏川の水ものがたり】

地域住民や国・県の河川担当職員が参加し、津留地区公民館にて裏川の水質環境に関する講演と座談会を開催している。

【裏川「水辺生き生きふれあい学級」】

裏川下津橋周辺にて投網を張り、魚を囲い込み、子ども達が裏川に生息する生き物を採取する。

子ども達は採取した生き物を地区公民館に持ち込み、講師から生き物の解説を受け、その種類の多様性に驚いている。

また、大分舞鶴高校生物部による顕微鏡での微生物の解説を行っている。普段から目には見えない裏川の環境美化に関心をもつ児童も増え、親子での夏休みの思い出づくりにも役立っている。

【3世代交流裏川清掃】

自治会の呼びかけのもと、地域住民約300名が毎年参加。裏川の河川敷や川底の清掃を行っている。

毎年、夏休みを地域活動で締めくくするため、時期を8月最終日曜日に設定

し、自分たちのまちは自分たちでできれいにするという地域づくりの自主性を育んでいる。

自治会が中心となり呼びかけを積極的に行うことで毎年300名の住民が参加している。

裏川もとても散歩しやすくなったと評判である。

【大分川河川敷花いっぱい運動】

舞鶴橋たもとの河川敷花壇約200mに年間2回（7月、12月）地域住民約200名でコスモス、チューリップ等の種植えを行っている。

津留地区を訪れてくれる方が気持ちよく河川敷を利用できるようにおもてなしの心を表現し、うるおいのある地域づくりを推進している。

【EM菌団子による裏川水質改善活動】

裏川の水質環境改善のため、津留・舞鶴小学校4年生の環境学習の一環としてEM（有機微生物群）菌団子を作り、裏川に投入している。

団子投入時は2つの小学校が一緒に「津留はひとつ」のころづくり

にも役立っている。

また、「津留地区女性の会」会員（主に70歳代）と児童と一緒に団子を作り交流を図っている。水質改善効果については専門家が数値管理している。

それぞれの活動への参加については、自治会が中心となり声掛け、町内回覧等と呼びかけている。子ども会、PTAへも積極的に呼びかけを行い、親子での参加も多くみられる。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

これらの取り組みは津留地区公民館・自治会が中心となっているが、地域の様々な団体（自治委員連絡協議会・体育協会、津留地区商工会、交通安全協会、民生児童委員連絡協議会、健康推進員、PTA、子ども会、老人会等）が参加する「津留地区ふるさとづくり運動推進協議会」がサポートすることにより、より住民参加の輪が広がっている。

現在、行事の円滑な運営には「津留地区ふるさとづくり運動推進協議会」の協力が無くてはならないものとなっている。

これまでの取り組みの成果として、河川敷のゴミは年々少なくなっているが、今後も、地域住民の津留地区への愛着を深め、地域住民が交流する貴重な機会として、こうした取り組みを継続し、次世代の住民に住み良い、住んで良かったと思える津留地区を引き継いでいきたい。



EM菌団子作成の様子

26年度奨励賞 テーマ:世代間交流

3 世 代 交 流 グラウンドゴルフ大会

高尾台自治会 稗田 毅



グラウンドゴルフ大会の様子

地 域 の 課 題

従来、町内のレクリエーションはミニバレーボール大会を実施していたが、ジャンプ・レシンプ等の動きが激しいスポーツという性格上、チーム編成が経験者主体となり、本来の目的である、住民の交流が図れなくなってきた。また、4年連続だけが人が出るなど、安全面での懸念も生じていた。

そこで、高齢者から子供まで未経験者でも気軽に楽しめ、3世代交流にもつながる競技を検討することとなった。

取 り 組 み 内 容

世代を問わずに取り組むことができる競技として、「3世代交流グラウンドゴルフ大会」を企画し、役員会・班長会に提案し了解を得た。

また、実施のため自治会で毎週グラウンドゴルフに取り組んでいる老人クラブ「万年青会」のメンバーに指導協力を要請し、快諾を得た。

開催日の約1カ月前から、出場希望選手を募るため各班に回覧を行い、各班長は選手集めを行った。

当日は子ども・父母・祖父母の混成でチームを編成し、班対抗戦として実施、子ども11名、父母8名、祖父母28名、応援団15名、計62名の参加があった。

競技終了後、団体表彰、大人・子ども個人表彰を行い、別途子ども選手には図書券の配布を行った。

【特に工夫している点】

6名編成のチームの内、各組に子どもを2人以上必ず入れるようにし、世代間交流につながるようにした。

次も参加したいと感じてもらえる大会環境を作るため、親・高齢者に協力を求めたところ、積極的に取り組んでもらえた。

特に高齢者はゴルフクラブの使い方など親切丁寧に指導するなど精力的に行動した。

【アピールしたい点】

子ども達は一打ごとに興奮し歓声をあげ、楽しそうにプレーしていた。応援の親たちも喜んだ様子だった。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

参加者同士が顔見知りになり、お互いに名前を覚えることができた。

子どもから高齢者まで未経験者でも怪我なくプレーできた。

また、高齢者が子どもを指導することで3世代交流につながった。

子どもが参加しやすい競技にしたことで、参加者が増えた。

24年（ミニバレー）…30人

25年（グラウンドゴルフ）…48人

【今後の展望】

「3世代交流グラウンドゴルフ大会」は子どもから高齢者まで交流ができ、気軽に参加できるので今後とも継続していきたい。

将来的に子どもには優しさを伝え、

子どもからは健康寿命をもらえる様な関係の地域づくり、人づくりを目指したい。

大会の内容を今後も役員・班長会議で紹介し、その他広報も活用し、自治会活動に興味を持つ人を増やしたい。

このような機会をとおして「共助」の精神を育て、町内の目標である「明るい挨拶と楽しい近所付き合い」に結び付けていきたい。

26年度奨励賞 テーマ:世代間交流

様々な活動を通じた地域づくり (周辺自治会と協力したまちづくり)

東大道1丁目自治会 赤松 成



地域の課題

当自治会は、大分駅周辺総合整備事業により、町内家屋の100%が移転、改築することとなり、また、新大分駅やホルトホールの建設、高層マンションの建設など、この10年で街の様子が激変した地域である。

こうした地域状況であることから、新旧住民の融和、地域の安心安全の確保など様々な課題に対応するための活動が求められていた。

取り組み内容

【清掃活動】

町内の環境美化と地域住民の協力体制の構築のため、大分市の「きれいにしようえおおいた推進事業」「ポイ捨て等防止パトロール団体」に登録。

開発が進んでいくまちを自分たちの力できれいにしようとの想いを持って40人程度が月2回程度、清掃活動・啓発活動に取り組んでいる。

また、完成したシンボルロード「大分いこいの道」の維持・管理をする
「大分いこいの道サポーター」にも参加して積極的に活動している。

【大分駅盆踊り大会】

隣接する金池南1丁目町内会と「大分駅前広場盆踊り大会」を実施、両町内住民で企画調整した。

このことにより、コミュニティが図られ、住民同士の交流を深め、相互に助け合う体制が築けた。

【大分いこいの道親善グラウンドゴルフ】

大分いこいの道を活用して町内の活性化を図る取り組みとして、周辺の自治会（東大道1丁目、2丁目、3丁目、金池南1丁目、上野丘1丁目、桜ヶ丘）が参加してグラウンドゴルフ大会を実施し、広域町内で連携して住民同士のコミュニケーションをとり、相互に助け合う体制を築いている。

【特に工夫している点】

地域内の高齢化が進んでいることから、若年層が多いマンション住民の協力をお願いしている。

各行事に代表者の参加はあるものの、多くの参加者があるとは言えない状況であるが、短期間で成果を求めるのではなく、時間をかけてふれあいの場を作っていこうと気長に声掛けを行っている。

また、新築マンションの管理組合設立総会には自治会宛てに出席案内状が届くようマンション建設業者にお願いしており、総会において自治会規約の抜粋や年間行事予定表を配布し、自治会への理解と協力を求めている。

活動の成果・今後の展望

周辺自治会との協力体制を築き、金池南1丁目自治会とは、情報交換をして課題の共有を行っており、協力して横断ミラーや横断歩道の設置を働きかけたりしている。

駅周辺総合整備事業により、町内の環境は大きく変化をし、今思えば住民も心身ともに何かと苦労が絶えない期間であった。

取り組みを継続してきたことにより、近所の人どうしが顔見知りになり、子どもからのあいさつも増えてきている。

今後も大分駅ビルの完成に伴い人の流れ・社会の流れが目まぐるしく変化することが想定されるが、取組を継続し、町内だけでなく、周辺自治会の住民同士の交流も図っていきたい。

26年度奨励賞

テーマ:コミュニティの活性化

町内会行事の活性化で、住民のふれあいと和（絆）の強化

新川町内会 川上 克規

地域の課題

自治会活動や行事の実施には、役員を始めとした住民の支援協力が欠かせないが、役員を担っていた世代の高齢化が進み、また転居者も多くなるなど、10数人いた役員や協力者が6名まで減り、自治会行事や活動の停滞が懸念されていた。

そのため、町内5大行事をはじめとする諸行事を継続し、住民のふれあいを深め、町内の活力の基盤である住民の和（絆）つくりと活力の維持向上を図ることが必要であると考えた。

取り組み内容

町内ではこれまで永年にわたり、町内5大行事として「運動会」「ウオーキング・慰霊祭」「盆踊り、敬老会、チャリティーバザー」「ふれあい餅つき大会」「生涯学習行事」を実施してきた。

このほかにも関連行事として夏祭り

や防災訓練があり、町内会役員は行事の計画・準備等に忙殺され、行事を削減するべきという意見もあった。

しかし、町内の和を一番に考え行事の継続を前提に対応を検討し、これまでの特定少数の役員による実行体制から、町内会の運営委員会や組長会、各専門部（婦人部、老人会、子ども会、碩新会、新川クラブ、防災会、体協）など他団体の役員を入れた実行委員会を組織し、行事のつど委員会を開催するなど多くの役員が分担して行事を実行する体制をとっている。

このことにより、現在もすべての行事を継続することが出来ている。

※碩新会…地区内から碩田中学校に通う生徒・保護者の会（会員23名）
※新川クラブ…青年部（会員40名）。

【特に工夫している点】

行事の運営主体を町内会から実行委員会に変更したことにより、円滑な行事運営を行うことができています。しかし、各専門部もそれぞれ独自

の年間行事計画があり、役員数も減っていることから、町内行事への協力が厳しいのが実態である。

このため、専門部の全役員がすべての行事運営に参加するのではなく、場合によっては各専門部からの参加者を一人にするなどの対応をとることで負担を軽減している。

また、各行事の反省会での意見や状況の変化に合わせて内容の見直しを行っている。

「運動会」は児童数の大幅な減少により実施が困難になったことから、「ふれあいウォーキング」に変更し、子どもから高齢者まで参加するようになった。（参加者約200名）

「生涯学習行事」は、バスで史跡めぐり等を実施していたが、文化行事を望む声が多かったため、公民館祭りと交互で実施することとした。

町内から出演者や手芸作品を募集、例年15名程度の方から応募があり公民館で発表している。各演目を見てサークルに加入する人や、手芸作品の作り方を習いに行く人が出てくる

などの波及効果が生じている。

（参加者 生涯学習行事45名、文化行事70名）

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

行事を実行委員会方式にしたことにより、町内のふれあいづくりの場である行事を継続することができ、転入者からも新川は町内行事が多くて楽しみが多いとの評価をもらっている。

行事の実行を通じて町内会役員と専門部役員の交流が図れ、その中で新川クラブの立ち上げができ、今では各行事において欠かせない存在となっている。

専門部間の交流も拡がり、婦人部と老人会が合同でバス旅行に行く、婦人部の公園愛護活動に新川クラブが参加するなどの連携が取れるようになった。

【今後の展望】

高齢化や世代交代が進み、住民の意識も多様化する中、町内会の運営は年々厳しさを増しているが、その使命は一層重要になってきている。

今後も町内会の運営や行事の実行に見直しや改善を図りながら多くの住民の参加を呼び掛けていきたい。

住民の和を非常時の共助活動へと繋げ、更に住みよいまちづくりを目指していきたい。



ふれあいウォーキングの様子

26年度奨励賞

テーマ:コミュニティの活性化

自治区民参加の「高江芸能祭り」を通じた地区・世代間交流

高江区自治会 後藤 肩一

地域の課題

高江自治会は、地域住民が一緒に集うような交流の場が少なく、催し等を開催しても参加者が思うように集まらないなど、連帯意識が薄れいまひとつ地域として活気がない状況にあった。

取り組み内容

地域の活気作り、元気づくりを目的に、高江老人会が行っていた芸能祭りを自治会との共同開催とし、毎年11月に地域の誰もが参加できる「高江芸能まつり」として開催することとした。

運営は、自治会と老人会の役員で行っており、10月に合同役員会を開催し、自治会は昼食の準備、老人会は参加者の募集、プログラムの作成、進行を担当する等、役割分担を決めて円滑な運営を図っている。

参加者として、地域で合唱や日舞、フラダンス等の教室を行っている団体に依頼し日頃の成果を披露してもらっている。

開催日前日は、自治会と老人会の役員で開催場所の公民館の大掃除を行い、当日は、自治会役員の奥さんが準備した果物やお酒、昼食を出して参加者のおもてなしを行っている。

【特に工夫している点】

当初は恥ずかしさ等により出演者が少なかったことが課題であったが、常日頃より自治会や老人会の役員が中心となって、住民をはじめ子ども会や元の福祉施設にも声掛けを行ったことにより、現在では、子ども会の合唱や日舞、フラダンス、詩吟、尺八等多様な演目が披露され、感嘆と笑いにつつまれ和やかで楽しいひとときになっている。

また、開催経費と運営方法も課題となっていたが、自治会と老人会で協議を重ね、経費の負担、昼食等おもてな

しの準備は自治会で、プログラム作成と進行は老人会で行うこととなり、スムーズな運営がなされるようになった。

活動の成果・今後の展望

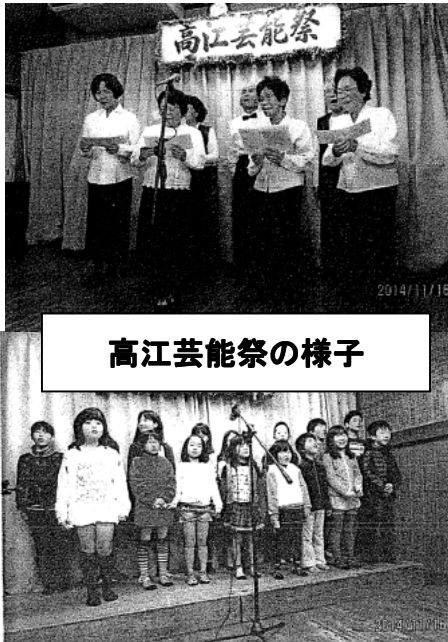
「高江芸能祭り」は今年で11回となるが、今ではすっかり地域住民が心待ちにする交流の催しとして定着し、地域が一体となって推し進める行事となり、住民の連帯意識の醸成に大いに役立っている。

高江自治会は4区で構成されており、区を超えての交流は極めて少なかったが、この芸能まつりがきっかけとなって交流が進み、他区のサークル活動に参加する人もでてくる等、新たなコミュニティが生まれ、地域の元気づくりにつながっている。

【今後の展望】

今後も内容を一層充実させ、子どもから高齢者まで多くの住民が気軽に参加し、楽しみながら交流が深まる催しへと大きく育て、地域コミュニティの再生と地域の活性化をさらに図ってきたい。

若い世代の参加が少ないことから、今後、若い人たちへのアプローチを積極的に行っていきたい。



高江芸能祭の様子

26年度奨励賞

テーマ:コミュニティの活性化

原村自治会活性化事業

原村公民館 佐藤 隆司

地域の課題

地区内では、大分川ダムの建設計画が具体化し地質調査などの周辺工事が進み始め、校区の住民が主体となって地区の自然を大切に残していくという必要性が生じていた。

取り組み内容

平成12年に原村公民館スタッフや原村子ども会、一般区民多数が集まって「原村ホタルを守る会」を発足、第一回の「ホタル観賞会」を開いた。

以来国土交通省の歴代副所長をはじめ地区内外の昆虫やホタルに詳しい講師を招き川に住む生物やホタルの生態などについて講演会を開き、終了後、現地川辺に行って毎年ホタルの乱舞を楽しんでいる。

また、ホタル観賞会以外にも、公民館と地域住民が一体となって様々な行事を開催している。

【ホタルの里づくり】

原村地区を流れる七瀬川では以前からホタルが群生していたが、これを地域資源と捉え自然の尊さと環境の重要性を認識し優れた自然環境を次世代に継承するため、ホタルが育つ環境づくりとして、河川周辺の清掃活動や整備に地域全体で取り組んでいる。

【原村産業文化祭】

原村地区の活性化を図る場として地域住民が楽しむ場、また、文化・伝統・絆を継承していく場として昭和63年に開始し今年度で21回目を迎えた。地域住民が生産した農産物・加工品の品評会、即売会、芸能・子ども神楽・おやじバンドなどのステージイベントを開催している。この祭りの前身は「原村文化の夕べ」で班対抗の演芸会だった。第1回は昭和52年10月に始まり、開始から通算38年の歴史を持っている。(平成20年より区民運動会と隔年実施中)

【原村歩こう会】

3世代が参加できるイベントとして実施しており、参加者にはごみ袋を配布して途中に落ちているごみを拾いながらそれぞれのペースでウォーキングを楽しんでいる。

【子ども会柱松上げ・納涼盆踊り】

お盆の行事である柱松上げ・盆踊りでは、竹の切り出しや藁の用意など、準備のすべてを地元の住民で実施しており、多くの子どもたちの参加があり、伝統行事を次世代に継承する場となっている。

※柱松あげ…下から小さい松明を投げ、大きい松明に点火する行事

【子ども会川遊び】

夏休みのイベントとして、地元消防団の協力を得て地区内の河川にボートや手作りのイカダを出して川遊びを楽しむ。子どもたちに自然の雄大さを伝える場となっている。

【特に工夫している点】

「はらむらホタル鑑賞会」の際には、自然環境に精通した講師を招いてホタルについての講演会を開催。

小学校の児童、保護者、校長・教頭、教諭に加え、周辺で建設中である大分川ダムの事務所職員も参加してともにホタルや、地区の自然環境について学ぶ場を設けている。

(26年度講師は昆虫巡査と呼ばれる日田市在住の元警察官佐々木茂美氏)

例年参加者は100名を超えており、地区の恒例行事として定着している。

また、ホタルの鑑賞場所付近の道路沿線にある防犯灯に、許可を得て消灯スイッチを付け、ホタルシーズン中の1か月半の期間ホタル観賞の妨げとならないように消灯しており、期間中は一日あたり50人程度の方が遠方からホタル観賞に訪れている。

活動の成果・今後の展望

少子高齢化、過疎化が進む中、地域の活性化は容易ではないが、営々と培ってきた区民の絆を大事にすることがコミュニティを維持する一番の方法であると確信している。

そのためには子ども会から老人クラブまでが一緒に取り組める活動が必要である。

原村区はいまから約40年前の昭和52年に野津原地区内で二番目に自治公民館組織を立ち上げた。同時に「原公民館だより」を発刊、現在120号を数え、号外も同数発行している。昭和63年には原村神社境内を整地造成し原村グラウンドを完成させた。

同時期に「原村文化の夕べ」、「原村区体育大会」、「原村一周歩こう会」、「盆踊り大会」を開始、現在も内容を工夫しながら盛大に続けている。

「継続は力なり」今後も若い人たちが引き継ぎ活動してくれるものと確信している。

26年度奨励賞 テーマ：安心安全のまちづくり

高城子ども会「防火パトロール」

高城子ども会 河村 智恵美

地域の課題

昭和50年頃、当自治区は戦後間もなく建築された古い木造住宅が多く防火が課題であった。

そこで、子ども会が地区のために何か役立つことが出来ないだろうかと考え、奉仕活動として地区内の夜間防火パトロールを開始することとなった。

また、地区内は少子化が進んでおり、パトロールを通じて地区内の子供たちが一つにまとまって活動する機会を増やすことも目的となっている。

取り組み内容

パトロールは12月の第2週の1週間、午後6時から行っている。

拍子木をカチカチと鳴らしながら、「火の用心！」「火の元気をつけよう」という子供たちの元気な声が夕闇の地区内に響き渡っている。

防火パトロールは学年の違う児童生徒が集まって実施することから、地区

の子供たちの相互理解とコミュニケーションづくり及び地区民とのつながりを深めることにもつながっている。

活動を開始した当初、高城には高城東区と高城西区という2つの自治区があり、それぞれの自治区の子ども会が活動をしていた。

このパトロールは高城東区子ども会が始めたものである。

しかし、少子化の影響もあり両自治区は合併、子ども会も高城子ども会となった。

このパトロールは合併した高城子ども会にも引き継がれ、平成26年12月の実施で38年目を迎えている。

【特に工夫している点】

○パトロールへの参加は強制ではないが、住民の協力・理解を得ることにより子ども会加入の全員が参加している。

○火の用心を呼び掛けることで子ども達も防災意識を持つことが出来る。

○パトロールは子どもだけではなく、保護者も参加しており、学年の違う保護者同士のコミュニケーションづくりを図ることが出来る。

○地域の方も子ども会に対する理解を深めることができる。

活動の成果・今後の展望

パトロールが始まって38年、活動が脈々と受け継がれていることに意義があると思う。

子どもたちもパトロールを心待ちにするようになった。

地域住民は直接パトロールには参加していないが、子どもたちのパトロールの声が近づいてくると外に出て励ましの声をかける住民が増えてきた。

また、地区民の子ども会への理解も深まり、子ども会が行う廃品回収などに積極的に協力してくれるようになった。

高城地区はお年寄り家庭が多いこと

もあって、子どもたちの声に防火意識を喚起される人も多く、パトロールの効果は非常に大きい。

子ども達に対する感謝の声も日常的に寄せられるようになっていく。

今後も高城子ども会の伝統を引き継ぎ、子ども達だけでなく地域の人々とつながりを深め、皆が仲良く暮らせる地域づくりに貢献していきたい。



パトロールを行う子どもたち

26年度奨励賞

テーマ:安心安全のまちづくり

地域の子どもは
みんなですり育てよう!

別保校区ヤングサポートパトロール隊
後藤 浩明



地域の課題

別保校区は大分市の東部に位置し、臨海工業地帯のベッドタウンとして、また沿道には多くの店舗が立ち並ぶ活気あるまちとして発展をしている。

しかし、住宅や店舗が増加するなど環境が大きく変化しており、子どもの非行また不審者による子供への声掛け事案が増加していることから対策が求められていた。

取り組み内容

【夜間パトロール】

平成8年に大分市補導員のパトロールから開始、平成10年に自治会の自主防犯パトロール隊と統合し、隊を発足。「地域の子どもは地域のみんで育てよう」を合言葉に、自治会、青少協、民生委員、青少年補導員、交通指導員、小中学校のPTAなど各団体を結束する形で行動している。

構成人数は500名を超えており、毎月

第2土曜日・第4金曜日の19時より、1時間程度、地域・学校・保護者合同のパトロール隊を結成し、毎回約60人体制で校区内4コースに分かれパトロール活動を実施している。

また、第3金曜日は深夜10時より深夜パトロールを実施しており、深夜に少年たちが集まりそうな場所を重点的にパトロールしている。

【登下校時の見守り活動】

地区内は車の通行量は多いものの、人通りが少ないことから、小中学生の登下校時間に合わせて毎日実施しており、年配の隊員を中心に取り組んでいる。

【地域安全活動】

月2回12時から16時、青色回転灯車両による見守りパトロールを行っている。また、年金支給日には警察とも連携して銀行などの金融機関・ATMでのビラ配布、小中学校の子どもたちや保護者を対象にした交通安全教室や痴漢等対処法の学習会を行っている。

【特に工夫している点】

独自に作成した「ヤングサポートパトロールマニュアル」をもとに、見慣れない人はいないか、地域で見かけない車が駐車していないかというところを着眼点にして実施している。

青少年非行防止のための活動として、パトロールの際に、自転車の無灯火や傘差し運転の注意、コンビニ・カラオケ店・ゲームセンターや河川敷、公衆トイレ周辺での深夜徘徊・不良行為に対する防犯活動を実施している。

また、深夜の親子連れなどを見かけた場合は声掛けをして早めの帰宅を促すようにしている。

「子ども見守り隊プレート」を作成し、隊員や地域の商店に配布、活動の目印にするとともに、子どもの見守りに対する共通認識を持つてもらっている。

8月には毎年地域の方を招いて「別保出会いふれあい音楽祭」を開催し、地域と子どもたちとの交流会として、

子どもへ目を向けてもらう努力をしている。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

不審者による子どもへの声掛け事案等が一時期非常に多かったが、これが目立って減少した。

また、地域の方々が日ごろから子どもに対して目を向けるようになったことも実感している。

また、子どもの見守り活動を通じて、地域・学校・保護者の交流の輪が広がり、子どもたちがいさつをするようになったという効果も現れている。

【今後の展望】

より活動を活性化するために各団体に参加の働きかけを行った結果、小学校の父親会等新たな団体も参加するようになった。

これからも地域の安心安全を守る一助となれるよう活動していきたい。

26年度奨励賞

テーマ:安心安全のまちづくり

けやき台マップの作成および 相互協力体制の確立

けやき台自治会 岡村 哲朗

地域の課題

数年前より「けやき台防災マップ」の作成を試みていたが、当団地は高台に位置しているため、周辺自治区に比べて、津波や水害に対する危機感が希薄で防災への関心も低く、自治会組織としての結束力も低下していた。

そのため、自治会員の防災意識を高め、住民同士の相互協力体制を確立することが課題であった。

取り組み内容

26年2月13日に大雪（積雪25cm）が降り、隣近所同士が一緒になって雪かきを経験、3月14日には震度4の地震が発生するなど災害を身近に感じ、地域での助け合いの必要性について痛感したことをきっかけに自治区長4名および防災士1名、民生委員2名が集まり「けやき台マップを作る会」を結成し、作業を開始。

会議を重ねた結果、「けやき台マップ」は、地域での助け合いという観点から「災害時に要援護者を地域全体で助け合う為のマップ作りをしたい」という意見が多く出され、「けやき台災害時要援護者支援マップ兼防災マップ」（略称「けやき台マップ」）を作成することとした。

市報の配布に合わせ「けやき台防災新聞」を発行し、「災害時要援護者とは」「地域における支援の意義」等について、自治会員への周知を行った。

また、「災害時要援護者支援マップ作りのお願い」のアンケート調査票を自治会員に配布し、災害時に援護が必要な家庭の特定を行った。

アンケート調査票をもとにマップを完成させ、9月1日までに「けやき台マップ」を全戸に配布した。

平成26年9月7日に、大分市のシェイクアウト訓練のプラスワン訓練の一环として「避難訓練」を実施し、「けやき台マップ」の活用方法を説明する

などして、自治会員の防災意識の向上を図った。

また、「避難訓練」の内容および反省点、今後の課題等については「けやき台防災新聞（第2号）」にて自治会員へ報告し、今後の相互協力体制の向上を促した。

【特に工夫している点】

子供や高齢者の方が見ても解り易いように、けやき台団地の全体図に、災害時に援護を希望する家庭の宅地に赤いマークを印すだけのシンプルなマップにした。

災害時に本当に支援が必要な家庭が、アンケートの回答を控えるのではないかと懸念されたが、防災新聞で事前に周知を行ったため、87戸からの援護希望者をマップに掲載することができた。

避難訓練等でも役立てられるように、急傾斜地（大分市のハザードマップに掲載された箇所）、集合場所および避難経路、災害対策本部を明示し、「防災マップ」としての機能も持たせた。

避難訓練については、「避難訓練手順書」を作成し、訓練の目的や役割分担を明確にした上、予定時間を記入するなど、参加者にとって解りやすく、スムーズに訓練が進行できるように配慮した。

多くの自治会員に参加してもらったため、3週間前に回覧を回して周知を図り、さらに4日前に電話連絡網にて全戸に「避難訓練」への参加を呼びかけた結果377名の参加を得ることができた。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

「けやき台マップ」を全戸に配布した後、直ちに「避難訓練」を実施したことで、自治会員の防災意識を高めることができ、参加者も多く集めることができた。

訓練に参加した自治会員からは、「けやき台マップ」について「今後援護が必要になったら、マップに入れてもらえるか?」「今後も避難訓練を行う予定があるのか?」等多くの意見・

要望が出され自治会で防災に対する意識が高まってきたことを実感した。

【今後の展望】

今回の「避難訓練」では、各町での参加人数にばらつきがあったり、アナウンスが聞きとれなかったといった課題も生じたりしたため、次回からは内容についても工夫して毎年1回以上の「避難訓練」を実施していきたい。

これからも、避難訓練等の自治会活動や防災新聞及び回覧板の配布をこまめに行い、自治会員の相互協力体制の確立を目指し、積極的に自治会活動に取り組んで行きたい。



避難訓練の様子

26年度奨励賞

テーマ: 青少年の健全育成

地域行事でのステージ出演による 地 域 活 性 化

HIOKA48 三浦 啓亨

地 域 の 課 題

日岡校区は転入者が多く、新旧住民が混在していることから、地域コミュニティの希薄化が地域課題となっている。

取 り 組 み 内 容

校区の児童の健全育成と、3世代の住民が一体となった地域のお祭りの実施を考えていた日岡体育協会会長と事務局長が、愛育会（PTA）に「城東春まつり」への子どもたちの出演を依頼したことをきっかけに、趣旨に賛同した児童20人と保護者ら30人が集まりHIOKA48を結成した。

現在のメンバー構成は日岡小児童、保護者、日岡校区体育協会、日岡小校長、教頭、教務主任、日岡小児童育成クラブ事務局、大分国際情報高校校長、地域住民からなる9歳～62歳までの40名である。

メンバーの活動は大分ケーブルテレビ

「もぎたてプラス」にて練習風景が

放送され、大きな反響を呼んだ後、

「城東春まつり」、「おおいた夢色音楽

祭2014」、「第33回日岡校区文化

祭」、「どこでもコンサートin大分東部

公民館」など、校区の内外を問わずに

イベントに出演し、AKB48の「恋す

るフォーチュンクッキー」ダンスや、

「Let It Go」ありのまま

「東日本大震災復興支援ソング

「花は咲く」合唱などを披露した。

観客の住民の皆さんも、子どもから

大人まで一緒になって楽しく踊ってい

るHIOKA48のステージを観て日岡

校区に暮らして良かったと改めて感じ

ているようだった。

ステージ終了後は大きな拍手が湧き

上がり、会場に一体感がもたらされイ

ベントの盛り上げにも大きく貢献する

ことができた。

練習は日岡中央公民館にて2、3月と9月、11月に週2回の行い、子どもだけではなく大人も一緒に汗をかいたことで参加者の一体感が高めている。

メンバーは日頃の自治会活動にも積極的に参加し、年間にわたり地域行事の縁の下の力持ちとして協力している。

自治会の方も日岡校区で取り組んでいるごみ拾いや花いっぱい運動のほかに地域を盛り上げる活動を望んでいたようで、この活動が「3世代交流をテーマにしている日岡校区の自治会活動を力強くサポートしてくれる」と考えていただいている。

また、「どこでもコンサート」の実施にあたってはで校区内の8自治会長が一体となり、校区内約5千世帯にチラシ配布を行ってくれた。

活動の成果・今後の展望

HIOKA48に参加した児童は大きなステージに立つことにより自分に自信を持つことができた。

こうした成功体験を地域の大人と子どもたちが共有することにより、日岡校区のまちづくりのテーマである「3世代交流」の輪を大きく広げていくとともに、日岡校区をより明るく活性化し、コミュニティの希薄化を解消する一助となることのできたのではないかと考えている。

今後も自治会と協力することで地域に貢献し、皆さんに住んで良かったと思ってもらえる日岡校区にしていきたいと思う。



夢色音楽祭に参加したHIOKA48

26年度奨励賞

テーマ: 青少年の健全育成

大柳自治区内子供の夏休みの思い出づくりならびに地域の皆さんの懇親の場作り

大柳自治会 仲野 敬徳



大柳子ども祭りの様子

地域の課題

大柳自治会では小学生の数が10名と少ないが、この子ども達と地区住民の交流機会がなかなか持てない状況であった。

取り組み内容

大柳地区では、青少年健全育成と子供たちに楽しい夏休みの思い出づくり、ならびに世代を超えた住民の地域でのふれあいを目的に「大柳子ども祭り」を開催することとした。

今年で3回目を迎え、大柳青壮年部が中心（自治会協賛）となり、老人会、ボランティアなどが参加し、そうめん流し用の竹の切り出しなど様々な準備を行った。

実施に当たっては、「子ども祭り」実施の周知回覧を2回行い、多くの人に参加を呼び掛けた。

「子ども祭りのメニュー」

そうめん流し（約30メートル）、スイカ割、ヨーヨー釣り、綿菓子、ゼリ
ーつかみ、じゃんけん大会、ミニ花火
大会、ラムネ・おにぎりの接待

【特に工夫している点】

「子ども祭り」実施に当たっては、自治会内の協力をお願いするため、役員会を開催し、特に、青壮年部・班長・子供会・ボランティア・老人会・消防団への協力を要請した。

お祭りの中心となる、そうめん流しの竹の切出しなどの実施メニューの打ち合わせも再度行い綿密に準備した。その結果、約70名の参加をいただき、子供たちの夏休みの思い出づくり、ならびに世代を超えた住民のふれあいの場の提供ができた。

なお、当日は小学校の校長先生の参加やテレビ局の取材などがあり、大変盛り上がった。

活動の成果・今後の展望

計画、準備、開催、後片付け等の作業を通じ、自治会内の青壮年部、班長、子供会、ボランティア、老人会、消防団等の結束が強まり、自治会内で何かをする際の団結態勢が整った。

本来の目的である青少年健全育成と子供たちに楽しい夏休みの思い出づくり、ならびに世代を超えた住民の地域でのふれあいについても、そうめん流しやスイカ割りといったメニューを参加者が一体となって楽しみ、大いに達成することが出来た。

最近では、子供会が自治会の催し物に積極的に参加する協力体制ができており、来年の火群祭りには子ども会も法被を着て参加することとしている。

今後も、この「子ども祭り」を通じて大柳自治会活動に全員が参加する体制作りを維持していきたい。



大柳子ども祭りの様子

26年度奨励賞

テーマ：地域福祉向上

体操教室で高齢者の健康づくり (西区いきいきクラブ教室)

宮河内ハイランド西自治会 佐藤 義夫



体操教室の様子

地域の課題

高齢化は当自治区にとっても例外ではなく、住民750名の内、70歳以上が106名となっている。

高齢者は、家に閉じこもり外出することもなく、自治会活動への参加はもとより、近所の人との会話も少なくなってきた。

そのため、高齢者に今後の人生を有意義に過ごしていただくための地域を構築していくことが課題となっていた。

取り組み内容

まずは誰でも気軽に参加できる活動が必要と考え、自治会の世話人会で意見交換を重ね、高齢者の健康保持・老化防止・介護予防及び高齢者のふれあいの場として、毎週水曜日を「健康づくりの日」と定め、体操教室を開催することにした。

講師（指導者）は、当自治会居住で大分市民健康ネットワーク協議会の運動指導者講習修了者の方に依頼。

誰もが気軽に参加できることと、無理をしない程度のメニューの設定を心がけ、ストレッチ体操をはじめ、歌って踊る健康音頭・ボールを使った筋力トレーニング・ボール回しなどを行う。

60歳から87歳までの登録者62名の内毎回約40名の参加があり、2ヶ月に1回程度「お楽しみ会」や「食事会」を企画している。

【特に工夫している点】

地区内には、過去に「ときわ会」というサロンがあったが、自然消滅してしまった。

このこともあって立ち上げの際には世話人会で多くの意見が出され、まずは包括支援センターや介護施設職員の出前講座を依頼し、食事や日々の健康づくりのアドバイスを受け、住民の健康づくりへの関心を高めることとした。

ひとり暮らしの方には日ごろから声掛けをして参加を促している。
自治会や老人会活動にもお互いに声をかけあい、参加者が増加した。

体操を行うだけでなく、2ヶ月に1回程度の「お楽しみ会」や「食事会」を企画したことで、みんなで楽しく会話ができて、更なる親睦が深まっている。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

体操の効果としては、「肩こりや腰痛が軽くなった」「よく眠れるようになった」「ストレッチ解消につながった」「体操に来るのが楽しい」などの声が聞かれ喜ばれている。

高齢者が毎週水曜日を楽しみにしており、また、当自治会以外の方の参加もあり、交流の輪が広がり「生きがい・ふれあい」のある場となっており、高齢者や一人暮らしの方の、安否確認・見守りの場にもなっている。

地区内であいさつをする人が増え、地域コミュニティの活性化につながっている。

【今後の展望】

これからも今の活動に甘んじることなく健康で元気な高齢者を増やし、明るい活気のある地域づくりを目指したい。



体操教室の様子